

# ダンスの授業における「かかわり」についての考察 —受講者のレポートの記述をもとにして—

大 橋 奈希左\*

(平成23年9月30日受付；平成23年11月7日受理)

## 要 旨

本稿では、従来から指導の難しい領域の筆頭に挙げられる「ダンス」の授業の問題点を先行研究から探り、その解決の方向性を示した。まず、ダンスの授業が難しいとされる理由を、指導者の立場と生徒の立場から明らかにした。その困難点の解決を目指して、大学院の授業「運動方法学演習（ダンス）」を行った。指導者の立場からの問題点を解決するための糸口として、「人間関係づくり」「雰囲気づくり」をねらって、他者とかかわるための教材が「しかけ」として準備された。また、生徒の立場からの問題点として、「創作ダンス」で「題材」や「イメージ」を言葉として例示し、即興活動や作品創作に取り組んで動きへと翻訳するという授業のあり方を挙げ、その解決を目指して、「創作」に至る段階的なプロセスを大切にした。その受講者のレポートをもとに、ダンスの授業における「自己」と「他者」のかかわりについて考察することによって、他者とともに踊ることを中心に据えた授業のあり方を提案した。

## KEY WORDS

Relation かかわり Dance Class ダンスの授業 Self 自己 Other 他者 Teaching Device しかけ

## 1. はじめに

平成20年に改訂された中学校学習指導要領では、中学校第1・2学年において、ダンス領域が必修化された。その解説には、「ダンスは、『創作ダンス』、『フォークダンス』、『現代的なリズムのダンス』で構成され、イメージをとらえた表現や踊りを通した交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることを楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。（下線部ママ）」<sup>1)</sup>とある。「交流」「仲間」「コミュニケーション」といった本研究のキーワードに近い用語が並ぶ一方で、相変わらず「イメージ」「自己を表現」といった用語がみられる。そして、「創作ダンス」については、「テーマ・題材」が例示されている。ここに、ダンス領域に根強くある「表現とは内から外へという一方向的な伝達構造である」という考え方が現れているのではないだろうか。本研究では、まず、表現運動・ダンスの授業が難しいといわれる原因を明らかにした上で、その解決を目指す授業を実践し、受講者のレポートの記述をもとにダンスの授業のあり方を探ろうと試みる。

## 2. 本研究で対象とした授業

本研究の対象となった授業は、10年ほど担当してきた大学院生を対象とした「運動方法学演習（ダンス）」である。上越教育大学の大学院では、現職教員と学部卒の教員の卵と一緒に授業を受講している。この大学院の授業においても、過去の受講者のレポートを振り返ってみると、受講前のことを振り返って、現職教員は「表現運動・ダンスの授業は難しいから避けてきた」と告白し、学部卒の者も過去の授業についてよい印象をもっていなかったと報告する場合が多い。平成23年度受講者のレポートにも同様の記述がみられたので、ダンスの授業の問題点を先行研究から明らかにする際に、紹介しながら考察を進めていきたい。

## 3. ダンスの授業の問題点

### 3.1 指導者の立場からみたダンスの授業の問題点

日本の学校におけるダンス教育は、第二次世界大戦後、指導者による既成作品の指導から、児童・生徒の自由な表現活動へと大きな転換を遂げた<sup>2)</sup>。だが、それ以来現場の指導者からは、様々な悩みが聞こえてくる。1980年代に水谷<sup>3)</sup>は、「ダンス学習がなぜ嫌われるか」について、生徒の立場からあげられる問題点と教師の立場からあげられる問題点を明らかにしている。ここではまず、教師の立場から問題点を明らかにしていく。水谷は、教師の立場からの問題点として、「1. 指導法がむずかしいから」「2. 指導内容がわからないから」「3. ピアノが弾けないから」「4.

\*芸術・体育教育学系

施設用具がないから」「5. ダンスの体育的価値が理解できないから」を挙げている。ここで挙げられた基本的な問題点は現在もなお、現場から聞こえてくる問題点と重なるところが多い。また、安藤ら<sup>4)</sup>は、徳島県における調査をもとに、「ダンスの経験や内容が児童にとって大切」であるとし、その価値を認めながらも授業実践していない教員がいるという矛盾があると報告し、「その背景には、教員自身にダンス、特に創作舞踊（表現運動）の体験が少ないことが挙げられる」としている。また、「そのことが、教員自身のダンスに対する考え方である『踊る』ことや『観る』ことは好きであるが『創る』ことが好きでないという結果を生んだ」と推察している。寺山<sup>5)</sup>も、「『表現運動・ダンス』は、指導しにくいと多くの教員が感じる領域であり、『意義を理解できても指導できない』状況に陥る可能性が高い」ことを指摘し、調査をもとに「表現運動」を指導する際の困難さを「授業中」「授業時間以外」に分けて考察している。「授業中」は、恥ずかしがる子への対応や、言葉がけの難しさ、動きを引き出す難しさ等が挙げられており、「授業時間以外」では、何をを目指すのか不明瞭、授業内容の構成のし方がわからないといった根本的な問題や、選曲やテーマ（題材）の選定といった準備段階での悩みも挙げられている。筆者自身も、本学で「ダンス領域」を担当する中で、安藤らが指摘するように、受講者が小学校・中学校・高等学校での体験が少ないこと、体験していてもよい印象を持っていないことを実感している。また、対象とした大学院の場合にも過去の受講者のレポートを振り返ってみると、現職教員は「表現運動・ダンスの授業は難しいから避けてきた」と告白していた。本年度の現職教員のレポートにも同様の記述が見られたので、紹介しつつ、問題点を明らかにしたい。

現職教員A：新学習指導要領も例外ではなく、小学校学習指導要領の体育編においても「表現運動系」の中にも登場する。中学年から表現運動につながる即興的な身体表現能力やリズムに乗って踊る能力、コミュニケーション能力など培えるようにする。とある。さらに、表現運動の学習指導では、児童一人一人が踊りの楽しさや喜びに十分に触れていくことがねらいとなる。と続く。その他具体的にも書かれているが、非常に広範囲な捉え方ができるとともに、いったい何を教えるの？と考えずにはいられないというのが私の感想である。即興的な身体表現。そもそも身体表現ができるってなんだろうから始まり、踊りの楽しさや喜び…とは、と考えてしまう。そして、自分が現場で経験した授業では、雰囲気がとても大切に動きを何度も何種類も教えないといわゆる「創作表現」は、生徒から生み出されない。さらには、グループごとに対立が始まったり、リーダーが人間関係で涙を流したりしてしまふ始末である。一つ言えることは、丸投げしたところで身体表現能力やコミュニケーション能力の高まりは期待できないということである。

このレポートにみられるような指摘や現場の状況の報告は、毎年レポートの中に現れる。現場では、児童・生徒が「創作」できていないという現場の状況は繰り返し、現職教員のレポートにおいて報告されているのである。また、「雰囲気が大事」という指摘や「人間関係」での行き詰まりもまた、このレポートのみでなく、授業を実践した指導者から、繰り返し指摘されている。そこで、本研究で対象とした授業では、「他者」とかかわり、人間関係を築いていくこともねらいのひとつとした。

### 3.2 生徒の立場からみたダンスの授業の問題点

先に挙げた水谷は、生徒の立場からの問題点として、「1. 創作させられるから」「2. 踊るのが恥ずかしいから」「3. 踊るのが下手だから」「4. グループ学習がうまく進められないから」を挙げている。また、対象とした授業の学部卒の受講者は、過去の表現運動・ダンスの授業について、よい印象をもっていない場合が多かった。今年度の受講者のレポートにも同様の記述がみられたので、少し紹介してみたい。

学部卒A：中学校の頃のダンスの授業を振り返った時に、何かを教わるような授業ではなく、チームを作って創作をするというものだった。創作をしても上手くいかなかった思い出があり、そのせいか、ダンスがあまり好きではなかったように思う。

学部卒B：私が中学・高校と受けてきた創作ダンスの授業は、各クラスでテーマを決めてそれを何とか一から考えていくというものでした。最終的にはダンス発表会があるので、それに向けて取り組むのですが、クラスによっては全く進まずに、いきなり表現活動を求められても・・・という戸惑いが大きかったことを覚えています。

学部卒C：私はこの授業を受けるまでは正直なところ消極的な心構えで受講を決めていました。実際に自分が体育教員になった時に扱わなければならない教材だから、という理由でこの運動方法学演習「ダンス」を受講する気

でいました。また、自分自身ダンスという単語についても若干の抵抗を感じていました。本格的に自分が経験していなかったこともあるのですが、自分を表現するということに対して難しい、恥ずかしいなどといった気持ちがありました。

これらのレポートから伺えるのは、自分を表現することや他者から見られることの恥ずかしさや抵抗感であり、特に、「創作ダンス」で、「題材」や「イメージ」を言葉として例示し、即興活動や作品創作に取り組んで、動きへと翻訳するという授業のあり方が、指導者も学習者も取組みにくい状況の原因になっていると考えられる。そこで、本研究で対象とした授業では、「題材」や「イメージ」から一度離れ、受講者が動きとしてダンスを体験することを目指していくことにした。

#### 4. ダンスの授業の問題点の解決のための視点

創作ダンスの運動の特性として、「表したいイメージや思いを自由に動きを工夫して踊り表現する（下線部ママ）」<sup>6)</sup>が挙げられる。だが、「表したいイメージや思い」は、動く活動に先立って自己の中にあるのだろうか。内山が「舞踊はもともとが共同的、間主体的な情動を媒介にした人と人とのコミュニケーションの姿である。」<sup>7)</sup>というとき、その情動はもともと自己の内に宿っているものではない。もし仮に前もってイメージや思いがあるとしても、他者とともに動くことを通して共有され、その正体が明るみにされるようなものである。矢野が、「他者との間で交通が可能なのは、精神と精神が直接に交通できるわけではなく、他者との間にすでに身体が介在し、その間身体性をもとにするからである」<sup>8)</sup>と指摘するように、ダンスの授業実践でも、他者と交流するためには身体が介在し、間身体性がもとなる。また、「主体が表現する」といえる一方で「ダンスが表現する」ともいえるのであり、交流する中でダンスが意味するものをお互いに生成し、共有していくと捉えることができるだろう。

本研究では、指導者の立場からみた問題点の解決を目指して「人間関係」「雰囲気づくり」を大切にするために、「他者」とダンスを通して交流することに主眼をおいた授業展開が目指された。また、生徒の立場からみた問題点の解決を目指して、「創作」に至るまでに、段階的なプロセスを経ることが目指された。

#### 5. ダンスの授業における「しかけ」の重要性

先に、ダンスの授業の問題点を挙げたが、筆者自身も、まだ大学院の授業を担当していなかった頃、生徒としての自分の体験をもとに、同じような問題点を抱えた学部生時代の授業を展開していた。ダンスは「動きの集合体」であるにもかかわらず、動き出す以前のテーマやイメージでつまづいてしまったり、「自己表現」という考え方のために他者とともに学ぶことに恥ずかしさを訴える受講者を目の当たりにして、「からだを動かす」導入から入っていくようになった。そして、指導者の動きを真似て、受講者同士がかかわりながら動く活動へと進んでいくようになった。自分を表現することを他者に見せるのではなく、他者とともに活動することに主眼を置いたのである。『『学び』は『活動』を通じて実現する。』そこで鍵になるのが、活動の中で、かかわりを促進するしかけである。鹿毛<sup>9)</sup>は、「教師たちは授業づくりの中で多様な『しかけ』を作り出している。」と指摘する。そして、「教師によるこのような『しかけづくり』の仕事は価値ある学びを成立させるために、『一人ひとりの子どもたちが授業中にどのような体験をするか』を予測しつつ、子どもたちの活動を教育的な方向に向けてコントロールしようとするにほかならない。」という。大学院のダンスの授業では、これまで「テーマ・題材」やイメージに捉われて動けなくなることの多かった受講者たちが「動く中で他者とのかかわりが深まる体験」ができるような「しかけ」<sup>注1)</sup>を教材として開発し、実践している。最終レポートの課題の1つに、「一番印象に残っている教材名を挙げ、その理由を説明してください。」を設定したので、受講者の記述をもとに、いくつかの「しかけ」の事例を紹介したい。

学部卒B：教材の「いざ！表現の世界へ!!（モノを使って①）ペーパームーブメント“風になろう”」では、一枚の紙を使って山嵐や竜巻を表現し、そこからベアを組んでみたり、自分でアレンジしたり、最終的にはクラス全体で動き出していました。いきなり、「風を表現してみて！」と指示を受けるより、一枚の紙を使って体を動かしてみることで、自分の中で風がイメージできると実感できました。一度イメージすることができれば、たとえ紙が無い状態になったとしても、思い出してアレンジしながら表現できると思いました。私の過去の創作ダンスの経験からすると、この教材はとても衝撃的でした。また、教具が紙なので誰にでも準備でき、実践でもすぐに取り入れることができると思いました。

ここで、学部卒Bが挙げたペーパームーブメント“風になろう”は、A4用紙を使って2人組みで行うコミュニ

ケーションワークである。A4用紙を手の平をはじめとして身体を使って、相手と受け渡しする活動であるが、モノがあることで、一度テーマや題材から離れ、他者と協同して工夫して動くことへと意識が向き、新しい動きの発見へとつながる「しかけ」である。

学部卒D：一番印象に残っているダンスは、現代的なリズムのダンスの「星に願いを」です。動きが速くなったり、ゆったりになったりと、強弱があったり、上下左右と様々な方向に動いたり、きちんと踊れていないにも関わらず一番楽しんで踊ることができました。また、8拍間の始まりや終わりなどにジャンプしたりしゃがんだり大きな動作が入っており、リズムに遅れたり、動きがわからなくても曲の途中から合わせることができました。そのため、動きが曖昧でちゃんと踊れていないにも、関わらずなんとなく踊れている気がして楽しく踊ることができました。動きが速い部分は、ステップが難しかったり、体の向きが変わったりしたのでなかなか覚えるまでに時間がかかりました。けれど、2時間目にはスムーズに踊ることができたりと、難しさを感じていた分、うまく踊れた時にはとても達成感を感じることができました。なによりも、手を床について足を前に投げ出す動きは、ダンス部の人などを見てかっこいいなと感じていたので、私が行ったのは1テンポ間に休みが入っていたけれども、ちょっとした優越感を感じることができました。

学部卒E：（「星に願いを」）授業では、実際にやってみると、振りをひとつひとつ細かくやるというより、一気に流して振りを覚えてやるというやり方だったので、物覚えが悪い私はとにかく振りを覚えることに必死で、体を動かしていた。少しずつ形になってくると、踊ることの楽しさを感じることができた。今までのダンスに比べて動きも速く、動きも複雑で覚えるまで大変だったが、その分踊れたときの喜びは大きかったと思う。また憧れもあったので、形となったときは嬉しかった。運動量もあり、心と体の底から動いている感じがあって運動している間は無我夢中で体を動かし、頭で考えることよりも、体で感じて動いている感じがあってよかった。また踊り終わった後も、体の疲労感とやりきったという思いがあって心地良かった。

学部卒DとEが挙げたのは、現代的なリズムのダンスであった。学習指導要領では、即興的にリズムにのることに重きを置いているが、ここでの「しかけ」は、「できそうでできない動きの組み合わせ」を準備し、「指導者の動きを受講者全員で模倣する」というダンス室の中での一体感を味わいながら、「夢中で踊る体験」を目指してつくられた。

学部卒F：私は、印象に残っているのは、「トラストウォーク」で誘導してもらっている時と、自分が人を誘導している時に、他の誰かを誘導している人と、誘導している人を交換するときだった。自分が誘導してもらっている時、いつも賑やかな体育館という空間が、いつもと違う場所のように感じた。目を閉じているだけで周りの音を聞くことや相手に触れている手の感覚が鋭くなっていたように思う。私は目を開いていないのに、誘導してくれている人がゆっくり多くのペアがいる中でぶつからないように道を選んで、速度を考えて丁寧に誘導してくれているようすが感じられたし、頭の中に浮かんだ。誘導している人を交換するときは、アイコンタクトで誘導者を交換したことが印象的だった。言葉を交わさずに、話したこともない人と、目を合わせながらだんだん近づき、何となく交換したい雰囲気や表情をだすので、私も顔を見合せながら笑って交換していくことがとても心地よく感じられた。また、無音で行うと緊張感もあったが、音楽を流すと少しリラックスすることができた。音楽の効果も無音の効果も大きくどちらも面白いと感じた。

学部卒Fが挙げたトラストウォークは、ネイチャーウォーク・ブラインドウォークなどとも呼ばれる教材であり、やはり2人組で行われる。リーダーが目を閉じた相手を誘導するのであるが、目を閉じた側は、「身体感覚を研ぎ澄ます」体験をすることになる。さらに、体験が深まるよう途中でブラインドのままのペアの交代をするように、しかけづくりを行った。

他にもYOSAKOIソーランやキンダーポルカ等様々な教材が挙げられたが、他者とかかわりながら行う「しかけ」を通して、受講者には様々な気づきや学びがあったことがわかる。

## 6. ダンスの授業における「かかわり」の独自性

上記のような授業者の「しかけ」をもとに、授業の中では何が起こっていたのであろうか。最終レポート課題の1



つに、『自己』『他者』『かかわり』というキーワードを視点として、授業全体を振り返り、気づいたこと、学んだこと、感想を書いてください。」を設定したので、その記述をもとにさらに詳しく振り返ってみたい。

学部卒G：今回、様々な教材を紹介していただき、経験する中で、「かかわり」によって生まれる「間」の美しさ、素晴らしさに気付くことができた。そして、私にはダンスにおいて、その「間」が常に存在するということが特徴としてとらえられた。これは、私自身の見方が変化したということであると思うが、「間」を意識することでも表現の幅が広がったり、作品の美しさが変わったりするのだろうと気付いたことによって、ダンスの授業そのものの見方、かかわり方が少し変化したように思う。さらには、自分自身の頭の中の発想がどんどん溢れるくらい、こんな風に動いたら、こんな風に空間を使ったら・・・ということがでてくるようになった。(略) また、授業を受けている中で、ダンスの教材を通じて「自己」の対話ができる、他者とのかかわりの中で「自己」への気づきがあるということも実感することができた。自分の身体を動かしながら、自分はこんな動きができる、こんな風に動いたら心地いい、気持ちを込めて動くことで自分の気持ちが変化しているなどといった自分自身の内側での気づきがあるということがわかった。また、他者と一緒に動きを作ったり、一緒になって楽しんで踊ったり、動きを教え合ったりする中で、自分自身の存在への気づきだったり、自分ができることの可能性に気付いたり、自分の役割について考えたりという「自己」への気づきも多くあった。

学部卒B：ダンスの授業の中で、「自己」と向き合う場面が何度かありました。「月のかけら」では、初めは覚えることだけで精一杯でしたが、何度も繰り返すうちに鏡の向こうの自分と向き合い、無心で踊り、表現することができていたと思います。その他には、バランスストレッチやリラクゼーションで、自分の呼吸を感じたり、全身の力を抜いて時間を過ごすことができたりと普段ではあまり味わえないような時間を過ごすことができました。一方で、「他者」と「かかわる」ことも多く経験しました。ペアを組むことや、クラス全体で取り組んだりする中で、他者と目線を合わせ、息を合わせて活動したり、手をつなぎフォークダンスを踊ったり、運動会ごっこでは、一つの作品を完成するなど、一人ではできないような経験を積むことができました。

学部卒E：…、手をつなぐことで、体と体で触れ合い、相手の体温を生で感じることで、また一緒に踊ることで、相手の呼吸を感じ、表情で会話をすることができた。生々しくて、暖かかったり、冷たかったりする相手の体温を感じることは、ある意味言葉では、伝わらない、感覚が伝わってきた。何かを伝えることは、言葉だけではなく、ただ手をつなぐだけでも伝わるものはあると思ったし、手をつなぐだけで、一瞬で今までの関係よりも、相手と近くなれた気がした。そして一緒に振りを合わせて踊ったりすることで、今までにない一体感を持つことができ、一緒にその時間を楽しむことができた。

学部卒C：同じ教材を使っているけど、人によってイメージする世界が違い、また、それを表現する方法も人によって違うため様々な世界を感じ取ることができ、自分の表現力の向上やその際に使う自身の身体についても知ることができたように感じます。また、このダンスという授業は個人だけでなく、他者との関わりがとても多く、そして、それが最も重要であるとも考えます。あまり知りあっていない人、少し苦手だなと感じている人、そもそも他者との関わり自体が苦手な人、こういった人でも自分の身体を思いきり動かしてしまえば、そこには何の遠慮もなくあるがままの自分をさらけ出すことができ、その素の自分と他者との関わりを持つことができるのではと思いました。言葉を使わなければ伝えられないことは、人間の世界においてそれは多数存在すると思います。それでも、自分の身体と他者の身体を動かし、互いのイメージする世界を表現し合えることで、互いの気持ちを感じあうという関わりを持つこともとても大切なのだと思います。言葉ではいくらでも嘘はつけるけど、身体全体を思いきり使って表現するものには嘘はなく、とても気持ちのいいものだのと改めて考えることができました。

現職教員B：ダンスの練習を繰り返し行う。あまりやったことのない動き。ダンスを通して自分の世界に入ること。踊りながら、踊りにはもともと呪術的な意味合いがあったと考えたこと。自分の動きを、鏡越しに見つめる。いろいろ自分と話をしながら練習している。同じ動きをしている他者を確認して、自分に置き換えてみる。先生からのアドバイス。仲間と会話すること。ダンスを介しての「他者」とのかかわり。そしてまた自分一人に帰る。「自己」とのかかわり。運動感覚を通して感じる。運動の内観を大切に動いてみる。究極的には自分とのかかわり。繰り返し、動き、汗が噴き出る。心の中から何かが表れる。ダンスは心の解放とわたしは考えている。それが動きとして現れる。表情として表れる。このダンスの授業を通して、知らなかった者同士がかかわり合い、仲良

くなることができました。学校で行えば、すばらしい成果が目に見えて表れることは間違いのないと思います。一人では決して生み出すことのできない動きを、互いにかかわり合うことで生み出すことができます。自分の姿を鏡や友達の動きに映し、振り返り、考えて、何度も表現をし直すことのできる素晴らしい教材だと感じました。

これらのレポートから、ダンスの授業実践においては、題材やイメージといった思いや言語の次元よりも、身体が介在した次元でのかかわりこそが、受講者に学びや気づきをもたらしていると考えられる。大貫<sup>10)</sup>は、「からだを動かすということに親しみ、自己のからだによる動きの可能性と限界を知り、他者のからだを感受し、呼吸ならびにステップを他者と合わせ、他者の個人空間に入り込み、他者を自己の個人空間に呼び込み、その他者を動きでリードし、またはリードされ、そうした諸行為から生まれる心身両面でのつながりを実現するには、ダンスは非常に豊かな指導・学習内容を宿している」という。この他者とのかかわり方と他者とのかかわりを体験する中での自己のつながりについての気づきや学びこそをダンスの「かかわり」の独自性として捉えるならば、「他者とともに踊る」ダンスの授業のあり方が提案できると考えられる。

### 注及び参考・引用文献

注1) この授業の教材は、平成16年度内地研究員として、愛媛大学教育学部牛山真貴子教授のもとで研修させていただいたことを中心に、対象となる受講者を想定して、筆者が「しかけ」としてアレンジしたものが中心となっている。牛山教授の開発した教材の構造については、下記の実践論文で考察している。

篠田明音・大橋奈希左(2006)「ダンスの授業における学習者の動きの発生に関する事例研究～牛山による実践の場面分析を中心に～」『舞踊教育学研究』第8号 pp.10-27.

- 1) 文部科学省(2008.9)中学校学習指導要領解説「保健体育編」, 東山書房, pp.118-133.
- 2) 片岡康子(1991)舞踊教育の思潮と動向, 舞踊教育研究会編, 舞踊学講義 pp.112-121.
- 3) 水谷光(1988)ダンス指導ハンドブック, 大修館書店, pp.25-35.
- 4) 安藤幸・岡田晶子(2003)徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点－1991年と2001年の表現運動の比較を通して－, 鳴門教育大学実技教育研究 13 pp.53-65.
- 5) 寺山由美(2007)「表現運動」を指導する際の困難さについて－千葉県小学校教員の調査から－, 千葉大学教育学部研究紀要第55巻, pp.179-185.
- 6) 村田芳子(2007.5)表現運動・ダンスの学習内容について考える, 体育科教育, pp.35-39.
- 7) 内山須美子(1999)ポスト・モダンに向けた舞踊の意味論－情動, 身体, 表現を鍵概念として, 体育・スポーツ哲学研究, 第21巻第2号, pp.1-9.
- 8) 矢野智司(1995)子どもという思想, 玉川大学出版部.
- 9) 鹿毛雅治(2008)授業づくりにおける「しかけ」, 秋田喜代美・キャサリン・ルイス編, 授業の研究 教師の学習, 明石書店, pp.152-168.
- 10) 大貫秀明(2005)運動のもつ可能性, 友添秀則他編, 教養としての体育原理, pp.28-32.

※本稿は、日本体育・スポーツ哲学会第33回大会シンポジウム：「自己と他者の運動実践を考える－『かかわり』の独自性と体育のあり方－」における発表「『かかわり』の独自性とダンスにおける「意味」の共有－実践を通して授業のあり方を探る－」の発表原稿に加筆・修正を加えたものである。

## A Consideration of the Relation in the Dance Class: Based on Feedback by the Participants

Nagisa OHASHI\*

### ABSTRACT

For this paper, I searched through previous research for problems encountered in classes on dance —an area that has hitherto been regarded as one of the most difficult fields of instruction— and determined the direction of resolution for these problems. First of all, I clarify the reasons why dance classes are regarded as being difficult from the perspectives of both the instructor and students. A graduate school class titled “Seminar of Sports (Dance)” was held with the aim of resolving these points of difficulty. As an opening for resolving the issues identified as problems by the class instructor, class materials “Teaching device” were prepared as a contrivance to generate interaction among the students with the aims of forging human relationships and creating atmosphere. Furthermore, “subject matter” and “image” were expressed in words as exemplifying problem points from the perspective of the students, and the class format in which students performed interpretive activities and created works —translating these into movement— was addressed with emphasis placed on gradual process toward “creation” in order to resolve these problem points. Based on feedback by the participants in this class, I present suggestions for a class style that focuses on students dancing together with others, which were arrived at by considering the relation between “self” and “others” in a dance class.

---

\* Music, FineArts and Physical Education